

歴史の再上映に立ち会う

エドゥアルド・ガレアーノ著、久野量一訳
『日々の子どもたち あるいは366篇の世界史』
岩波書店、2019年

「世界史」という言葉を含んだタイトルが気になって、この本を手取る読者は少なくないだろう。著者がマヤの書から引用したらしい、*Los hijos de los días* という原書タイトルをそのままに訳した「日々の子どもたち」という表現も奥行きがあるが、それに「あるいは」と続けられ、訳者によって付け加えられた副題「366篇の世界史」は本書の核心を見事につかんだフレーズだ。「世界史」と聞いて一般的に思い浮かべるのは、高校の授業で習うような、著名な人物や出来事が次々に登場して古代から現代に至るまで綿々と続けられるひとつながりの人類の営みといったイメージだろう。しかし、本書はその世界史を366篇という複眼的な視点からとらえることから始めるらしい。揺るぎのない1つの事実のように思われる世界の歴史を、どのようにして366の複数形として語るのか。ベネズエラ出身のアーティストであるベアトリス・イングレススによって描かれた、ストーンヘンジのような石造建築のモノクロの絵を中央に配置したシンプルな装幀のカバーを眺めていると、想像力と好奇心が湧いてくる。

本書の構成はいたって分かりやすい。1月1日から始まって12月31日で終わるまで、1日を単位にして、かつてその日付に地球上のどこかで起こった出来事や、その日からインスピレーションをえて著者が思い浮かべたことが記されていく。訳者あとがきで触れられているが、著者は自身を「言葉の泥棒」と呼んでいて、自らがこれまでに読んだり、聞いたり、見てきたことをもとに、その日ごとの歴史を作り直していく。先人たちの言葉に多くを負っている彼の言葉遣いは、歴史を語り継いでいく語り部のそれに似ていて、絶対的な客観性を求めようとする必要もなければ、想像力を飛躍させすぎるわけでもない。1日のエピソードの分量はかなり抑えられていて、1ページを越えるものは見当たらず、2、3行で終わる日も多い。

このように、限られたスペースにおいて文章を絞り上げ、簡素かつ強靱な表現を生み出していく著者のスタイルは彼の近年の著作でも確認できるが、彼の作風が徐々に変化してきたことは、日本語に翻訳されてきた彼の著書を読めば感じ取られるだろう。ウルグアイ出身のエドゥアルド・ガレアーノの名を世界に知らしめたのは、1971年に執筆された『収奪された大地 ラテンアメリカ500年』であり、この本は彼が職業としてきたジャーナリスト及び編集者としての手腕が存分に発揮された作品である。1492年のクリストバル・コロンブスのアメリカ大陸到来から、20世紀のアメリカ合衆国の苛烈な支配に至るまで、およそ500年に渡る壮大なラテンアメリカの歴史を描き出して、今やラテンアメリカの歴史を知るための古典的名著にも位置付けられる本作であるが、その特徴は緻密な調査に裏付けられたガレアーノの重厚な論の展開だった。

その後、1986年に完成した『火の記憶』3部作は、やはりラテンアメリカの歴史をマヤの神話時代から現代まで語り通すという長大なパースペクティブを備えているが、語りの手法は『日々



の子どもたち』と同じように、短い物語の断片的な連続というかたちを取っている。そこではフィクション的な叙述の側面が強まっており、歴史的事実を前後関係を整理してわかりやすく提示する実証主義的な立場を離れて、歴史と詩学が結びつく点を探求しようとする試みがより強くあらわれている。

『火の記憶』の序文でガレアーノが述べた「歴史というものに、生気を、自由を、ことばを取り戻してやる」という狙い、または「文学の部類でいうと何にあてはまるのかを、わたしは知らない」とした態度の延長線上にあるのが、『日々の子どもたち』だろう。しかし、「火の記憶」と本作との間に差異を見出すならば、それは本作が日付という視点から歴史をより自由に、そしてより広い視野で普遍的に語ろうとしていることではないだろうか。『収奪された大地』や『火の記憶』ではラテンアメリカという特定の地域における過去の歴史を、過去として語る事がなされていた。各エピソードには年号が記されており、引用元の出典も明記されていて、そこに書かれた一つの事象はそれ自体として自律的に存在せしめられていた。一方、『日々の子どもたち』では年月日によって出来事が定位されて語られることも多いが、より目を引くのは、日付という枠組みの中で、国や時代を超えて出来事が不意に結びつけられることだ。

例えば、1月3日の「移動する記憶」という話では、紀元前47年のローマとエジプトとの戦争で炎に包まれたアレクサンドリア図書館の資料と、その2000年後、イラク戦争においてアメリカ軍の手によって灰となったバクダッド図書館所蔵の書物とが結びつき、最後には書物が戦火を逃れるために10世紀末のペルシャで考案された、ラクダによる移動図書館というアイデアが紹介される。ここでは、英知の結晶である書物と図書館を破壊する人間の愚行が時と場所を超えて繰り返されていることを知ると同時に、そうした醜さと対比されうる鮮やかで愉快的な書物との付き合い方をすでに人類は遠い昔に知っていることが明かされる。ここにはいくつもの時間や場所を行き来するような感覚がある。または、7月31日の「予告された時」で描かれる、古代マヤでの粗末に扱われたモノたちの反乱と、そのずっと後のユカタンや1847年におこった奴隷の反乱の結びつきや、8月9日の「先住民の日」で引用されるグアテマラの先住民活動家リゴベルタ・メンチュウの「わたしはこの賞を マヤの人々への敬意として受け取ります。たとえそれが五百年遅いものだったとしても」というノベル平和賞授賞式でのスピーチからは、私たちが実感としてはなかなか感じられない、歴史的な闘争の持続に触れることができる。こうして、特定の日に起こった出来事たちは、ガレアーノの手によって時間をこえて他の出来事と引きつけられることで、普遍性を帯びたものとして新たに立ち上がるのだ。

また、本書全体を通して、基本的に1日ごとに語りは完結しており、それぞれの日々は独立しているのだが、同じような話題やテーマが何日か続くこともある。6月9日の「冒瀆女たち」では、1900年初頭のスペインでエリサ・サンチェスとマルセラ・グラシアが性別を偽って結婚式をあげ、その後同性愛の罪で国を追われる過程がスリリングに描かれる。この日は「ブエノスアイレスで逃亡者の足跡は失われた」という文で終わり、翌日6月10日は「そして一世紀後」というタイトルで、2010年にブエノスアイレスで同性婚が合法化されたことが語られる。こうして連続しながら個々に区切られている日付を跨ぐによって、歴史上の一時点におけるとある人々の願いがその後の時代へ受け継がれる、そうしたダイナミックな歴史の運動が展開される。

訳者やこの本の他の書評がすでに指摘していることだが、ガレアーノが「世界史」を形づくるために引き出してくる主体は、大文字の歴史の舞台ではなかなか日の目を浴びてこなかった者た

ちである。先住民や女性、黒人奴隷、そして私たちを取り巻く自然といった、人間の歴史の発展の過程で抑圧され、従属化され、排除されてきた者たちの記憶を取り戻そうとしている。重要なのは、先述したエリサとマルセラの逃亡譚に見られるように、彼らを悲劇的な犠牲者として描くのではなく、歴史の必然性の文脈から逃れていくような生き生きとした存在として語っていることだ。ガレアーノのウィットに富んだ筆致は、強者たちを皮肉り、忘れられた者たちの生の瞬間を鮮やかに浮かび上がらせる。このようにして編み出されるのは、教科書で学ぶ強者たちの手による歴史の裏に常に並行してあった、複数の「不服従の世界史」なのである。

こうして、私たちが前提としている時間感覚もガレアーノは揺さぶってくる。日付というのは共通の時間単位であり、それ自体は均質なものかもしれないが、じつは私たちは国や宗教や民族によって、日々の捉え方を無意識に画一化してしまっている。祝日や記念日など、私たちはつねに日付に意味を持たされて、それが国家などの共同体のつながりを強めるために利用されることもあるのだが、そうした凝り固まった時間との関係を本書はときほぐしてくれる。はじまりの日である1月1日のエピソードは「今日という日は、マヤ人、ユダヤ人、アラブ人、中国人、さらに世界に住む多くの人々にとって、一年の最初の日ではない」という一文から始まるし、12月4日の「緑の記憶」では年輪によって、ときには2000年をこえて世界の記憶を刻んでいく木々の思いに耳が傾けられる。こうしたエピソードからは、当たり前のことだが、人それぞれ、または生物や無生物それぞれにとって時間は多様に生きられていることを実感する。

ところで、本書を読んでいて私が思い浮かべた文章がある。日本の詩人、尾形亀之助が子どもたちへ宛てた散文のなかで書いたこのような一節だ。

——考えてもみるがよい。時間というものを「日」一つの単位にして考えてみれば、次のようなことも言い得ようではないか。それは、「日」というものには少しも経過がない——と。例えば、二三日前まで咲いていなかった庭の椿が今日咲いたということは、「時間」が映画に於けるフィルムのように「日」であるところのスクリーンに映写されているのだということなのだ。雨も風も、無数の春夏秋冬も、太陽も戦争も、飛行船も、ただわれわれの一人々々がそれぞれ眼の前に一枚のスクリーンを持っているが如くに「日」があるのだ。そして、時間が映されているのだ。と。——（「泉ちゃんと獵坊へ」『美しい街』、2017年、159頁）

この前の箇所でも、尾形は親と子どもの年齢の差は大きく、親子関係に縛られて生きることのむなしさを説いている。それから急にこのような彼独自の時間感覚へと話が及ぶのだが、私はここで言われている「スクリーンとしての日」という感覚がなかなか掴めずにいて、『日々の子どもたち』を読んでいるときにそれがなんとなく理解できた。たしかに、それぞれの日付にはそれ自体に時間の流れはなく、均質で不変（普遍）なものとして、まさに映画館にある真っ白で平らなスクリーンのようにして存在している。私たちはそのスクリーンの上で様々な生を営み、その生きられた時間をもって日付は意味を獲得する。あらゆる存在には等しく「日」というスクリーンが割り当てられていて、そこにはつねに時間＝フィルムが映写されつづけているのだ。歴史を語るということは、無数のスクリーンのうちに流れる特定の時間の瞬間を切り取り、つなぎあわせる行為だといえるだろう。

であるならば、ガレアーノが行っているのは、これまであまり人々が観ようとしてこなかったスク

新谷和輝「歴史の再上映に立ち会う」(エドゥアルド・ガレーノ著、久野量一訳『日々の子どもたち
あるいは366篇の世界史』) /NIIYA, Kazuki. "Witnessing the Re-Screening of Histories."
(On GALEANO, Eduardo. *Los hijos de los días*, translated by Ryoichi KUNO)

リーン上の時間＝フィルムを見つけ出し、再編集し、再上映することである。誰もが見たがる人気作の影に隠れてしまっていた、オルタナティブな時間たちを召還すること。日付そのものは意味のないフラットでヴァーチャルなスペースであるが、そこに映されてきた時間のどれを見るかは自由であり、その組み合わせも多彩だ。このようにして『日々の子どもたち』は、ガレーノなりの集合的な時間アーカイブを形づくっていく。この意味で、ガレーノの仕事は、過去の映画から次々と引用を行い『映画史』や『イメージの本』という作品を作ってきた、ジャン＝リュック・ゴダールの仕事と結びつくかもしれない。

本書を読んでいるときに、遠く離れた時間が今私たちが生きている時間と接続される感触を覚えるのは、日付という単位において様々な時間の流れがコラージュ的に重なり合い共鳴する、そうした複数の時間の邂逅に私たちも読書を通じて立ち会っているからにほかならない。この本を読むことで、今はもうないがかつてたしかにあったものたちの時間や、ここには書かれていない膨大なその他の時間を想像できる。私たちの今の時間は、それらの時間と絡まりあい、また新たな「日々」を産んでいこう。ガレーノが綴る、個別具体的であると同時に普遍的な輪郭をもった歴史の歩みは、歴史を捻じ曲げ、我有しようとする者があとを絶たない今、または皆が画一的な時間を生きるよう暗に迫られているようにも思える現在の世界において、貴重な道しるべとなるにちがいない。

(新谷和輝)

日々の子どもたち

あるいは366篇の世界史

エドゥアルド・ガレーノ
久野量一 訳



新潮書店